



Title	大学生の「子ども観」に関する研究：保育職志望度との関連で
Author(s)	嘉数, 朝子; 島袋, 恒男; 當山, りえ; 喜友名, 静子; 友利, 久子; 廣瀬, 真喜子
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(51): 207-213
Issue Date	1997-11
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1936
Rights	

大学生の「子ども観」に関する研究

—保育職志望度との関連で—

嘉数朝子*

島袋恒男*

當山りえ

喜友名静子**

友利久子***

廣瀬真喜子****

College Students' Perceptions of Children

1. 研究の背景と目的

本研究では、保育者養成の一貫として、大学生の「子ども観」をとりあげる。教師の子どもに対する接し方には個人差がある。この違いには経験や指導技術など様々な要因があると考えられる。教師の子どもに対する認知の仕方、子どもへの接し方に多大な影響を与えられる。本研究では「子ども」に対する認知の仕方、「子ども観」とよぶ。具体的には、「子どもは一個の人格を持つ人間である」、「子どもは親の一部分・物である」、「子どもはあらゆる可能性・能力を持っている」、「子どもは無力・無能な存在である」、「子どもはかわいい存在である」、「子どもは憎らしい存在である」といったものがある。「子ども観」の持つ力として、例えば母親の持つ「子ども観」はその母親の養育態度に影響を及ぼしている。「子どもは泣くものだ」と考える母親は、子どもが泣いてもさほど神経質にはならない。

「子ども観」は厳密な意味での学術用語ではない。心理学の学術用語の中で、これに近い意味を持つ用語としては「児童観＝子どもをどのようにみるか」、「発達観＝子どもの成長発達をどのように考えるか」がある。小嶋（1982）は、両者は切り離すことのできない連続する意識であるとし、「児童発達観」という命名をしている。母親の場合は「育児観＝育児をどのようなものとするか」も関連が深いであろうし、教師の場合は「教育観

＝教育をどのように捉えるか」も関わってくるだろう。本研究では、厳密な定義は困難であるため、「子どもをどう捉えているか」という程度の広い意味で「子ども観」という用語を使用する。

「子ども観」に関する実証的な研究には、次のようなものがある。

柏木（1978）は、乳幼児を持つ日米の母親を観察・比較して母親の養育態度が、母親の子ども観と役割意識の反映であることを示唆している。これによれば、日米の母親の子どもへの働きかけの違いは、母親が子どもと母親との関係をどう考えているかの違いであると述べている。日本の母親は乳児を「小さく、弱く、助けのいる存在である」と考えている。さらに、母親と子どもは不可分で密接な関係であると考えられるために、接触時間は長く、子どもをなだめたり、あやしたりする傾向がある。逆にアメリカの母親は、乳児といえども「母親とは別個の存在」であり、「赤ちゃんは活発であるのが良い」という意識が、母親に乳児と離れた時間を持たせ、赤ちゃんに対して発声や活動を促すような働きかけをすると柏木は解釈している。

永澤（1996）は、母親を対象に「こども観」尺度を作成し、6つの因子を見いだした。さらに、母親が持つ子ども観と子どもに対する母親の養育態度との関係について検討した。その結果、子どもの加齢に伴う子ども観の変化はないが母親の年齢により子ども観は変化することや、次のような

* 琉球大学

** 沖縄キリスト教短期大学

*** 日本女子大学研究生

**** 琉球大学非常勤講師

母親の子ども観と養育態度との関係が示された。子どもを「一個の人間」として捉え、子どもの存在を尊重している母親は、子どもに対して拒否的、支配的でない。子どもを「否定的な存在」として捉えている母親は、子どもに対して拒否的、支配的、不一致的な態度をとる。子どもを「愛しい存在」と捉えている母親は、子どもに対して拒否的、支配的でない態度を示したり、かわいさのあまり保護的、矛盾的な態度をとる。子どもを「親の一部分・私物」と捉えている母親は、子どもに対して拒否的、支配的、保護的、服従的、矛盾的な態度をとる。子どもを「不完全な存在」と捉えている母親は、子どもに対して支配的、保護的、服従的な態度をとること等が明らかになった。

藤永(1983)は、児童観や育児観は長い文化的伝統や社会、経済的条件を基盤として形成されていると述べているが、友利(1995)は、母親の子ども観の地域差を検討した。東京都豊島区と沖縄県那覇市を比較した結果、前者は「個人主義的」、つまり子どもを独立した一個の人格者として捉え、後者は「同胞主義的」、つまり子どもを家族の一員として捉えていることが見いだされた。

以上のように「子ども観」についての研究は母親を対象としたものが多いが、教師にとっても子ども観は重要な概念である。吉田・佐藤(1991)は、教育実習の時期、性別の要因が教育実習生の子ども観に与える影響の分析を行い、教育実習の時期による子どもたちに対する評価は、ポジティブなものから、ネガティブなものへと変化し、再度ポジティブな評価に安定するという一貫した傾向が認められることを示した。教師の中でも、教科指導がなく、年少の子どもと接する保母にとっては「子ども観」は、子どもとの接し方に直接的な影響力を持つであろう。また、柴田(1995)は、保育経験の違いによって、子ども観が変化することを見いだしている。

本研究では、保育者養成の一貫として、保育科学生の「子ども観」を検討する。「子ども観」の相違によって、子どもへの接触の仕方、ひいては保育実習の正否にも影響するのではないと思われる。本研究の第1の目的は、保育科学生の「子ども観」を検討する尺度を作成することである。その際、永澤(1996)の母親の子ども観尺度を保

育者用の尺度として使用する。第2の目的として、「子ども観」に影響する要因として、保育職への志望度を取り上げる。保育科には、保母になりたいと志望する者と、保育科であっても保育職以外の職業を選択する者がいるので、研究の第一段階として、保育職への志望度の違いによる「子ども観」を検討する。

2. 方法

1. 被験者；沖縄県のk短期大学保育科2年生119名(女子117名、男子2名)。
2. 調査時期；1996年7月中旬。「教育心理学」のクラスで一斉に実施した。この時期には、全員が施設実習・保育所実習を既に体験していたが、幼稚園実習はまだ体験していない段階であった。
3. 調査尺度
 - 1) 永澤(1996)の、母親がもつ「子ども観」尺度を使用し、測定した。45項目から構成されている。「子ども観」を表す45項目のそれぞれについて、「非常にあてはまる(5点)」から「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。
 - 2) 志望度は「将来保育者志望ですか」という問いに対し、「はい」・「いいえ」で回答を求めた。

3. 結果と考察

1. 「子ども観」尺度の因子分析の結果

「子ども観」尺度について、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、7因子が抽出された。その結果を表1に示した。

第1因子は、「天使」、「目に入れても痛くない」、「いとおいしい」、「純粹」などの8項目が高く負荷し、子どもはかわいいと言うイメージがあるため「いとおいしい存在」の因子と命名した。

第2因子は「個性」、「独自の世界」、「発想が豊か」などの8項目が高く負荷していたので「個性的存在」因子と命名した。

表 1. 因子分析

質 問	項 目	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6	FACTOR7	h ²
天使のようである	Q21	-.7544							.6579
目にいれても痛くない	Q39	-.6797							.5664
いとoshii存在	Q41	-.6359							.5885
純粹である	Q43	-.5535							.5262
かわいい存在	Q12	-.5055							.5589
愛らしい	Q 5	-.4691							.4647
素直	Q22	-.4523							.4413
むじゃき	Q37	-.4515							.4715
個性をもっている	Q29		-.7612						.5872
子どもなりの世界をもつい	Q34		-.7210						.5760
発想が豊か	Q31		-.6485						.5283
いやな存在	Q35		+.5874						.6479
おもしろい	Q26		-.5279						.4466
可能性	Q15		-.5261						.5655
能力は無限	Q44		-.5057						.5153
創造力	Q 3		-.4168						.3489
生意気	Q40			.7867					.6679
手間がかかる	Q27			.6342					.4641
うるさい	Q32			.6156					.5668
わがまま	Q 9			.6116					.5288
面倒くさい	Q17			.5714					.5005
自分勝手	Q14			.5666					.5151
未熟である	Q28				-.7077				.5478
不完全	Q19				-.5732				.4153
一人ではできない	Q42				-.5649				.3789
一人で生きられない	Q13				-.5263				.4576
すぐ泣く	Q45				-.5253				.4066
大人の保護が必要	Q10				-.4500				.3336
貧弱である	Q 1				-.4018				.4802
親の一部分	Q18					-.7156			.6235
無能	Q25					-.6905			.5701
大人に口答えはできない	Q23					-.6175			.5299
何も知らない	Q38					-.4706			.3918
親のもの	Q30					-.4630			.4769
生きる力がある	Q36						+.6437		.5846
一個の人間	Q 4						.6254		.5332
人間として尊重	Q16						.4626		.2662
すばらしい力がある	Q24						.4187		.5388
きびしく教育	Q 8							.6462	.4905
親の思いどおりの教育	Q 2							.6391	.5977
親の言うことを聞く	Q 7							.6048	.4979
固 有 値		4.1292	3.9381	3.5219	3.1885	2.8330	2.6065	2.2571	
因子寄与率		9.1759	8.7514	7.8265	7.0875	6.2955	5.7923	5.0158	
累積寄与率		9.1759	17.9273	25.7538	32.8395	39.1349	44.9272	49.9430	

第3因子は「生意気」、「手間がかかる」、「うるさい」などの6項目が高く負荷していたので「煩わしい存在」の因子と命名した。

第4因子は「未熟」、「不完全」、「一人ではできない」、「すぐに泣く」などの8項目が高く負荷していたので「未熟な存在」因子と命名した。

第5因子は「親の一部」、「無能」、「親のもの」、「何も知らない」などの5項目が高く負荷していたので「親の所有物的存在」因子と命名した。

第6因子は「生きる力がある」、「親とは別」、「人間として尊重される」など4項目が高く負荷していたので「尊重すべき存在」因子と命名した。

第7因子は「厳しい教育」、「親の思い通り」、「親の言うことを聞く」の3項目が高く負荷していたので、「教育すべき存在」の因子と命名した。

以上のように、本尺度は、保育者用の子ども観尺度として使用できることが示唆された。これまでの結果から、保育科学生の子ども観は、①「いとおいしい存在」、②「個性的存在」、③「煩わしい存在」、④「未熟な存在」、⑤「親の所有物的存在」、⑥「尊重すべき存在」、⑦「教育すべき存在」の7つの因子から構成されることがわかった。

2. 各項目の平均値

因子ごとに各項目の平均値を算出し、表2

表2 子ども観尺度の下位因子の平均値

F 1 (いとおいしい存在)

変数名	平均値
1) Q5 愛らしい	4.6471
2) Q12 かわいい	4.6134
3) Q21 天使のようだ	3.8992
4) Q22 素直	4.4202
5) Q37 むじゃき	4.5966
6) Q39 目に入れても痛くない	3.6975
7) Q41 いとおいしい	4.3529
8) Q43 純粹	4.6134
合計得点	34.8403

F 2 (個性的存在)

変数名	平均値
1) Q3 創造する力	4.6891
2) Q15 無限の可能性	4.7983
3) Q26 おもしろい	4.4538
4) Q29 個性的	4.7899
5) Q31 発想が豊か	4.6891
6) Q34 独自の世界	4.5882
7) Q35 いやな存在	1.6218
8) Q44 能力は無限	4.7479
合計得点	34.8403

F 3 (煩わしい存在)

変数名	平均値
1) Q9 わがまま	3.5882
2) Q14 自分勝手	3.4370
3) Q17 面倒くさい	2.2857
4) Q27 手間がかかる	3.5378
5) Q32 うるさい	2.8487
6) Q40 生意気	3.2269
合計得点	18.9244

F 4 (未熟な存在)

変数名	平均値
1) Q1 ひ弱	2.9580
2) Q10 保護が必要	4.2521
3) Q13 一人で生きられない	4.3277
4) Q19 不完全	3.4286
5) Q20 自己中心	3.7479
6) Q28 未熟	3.8571
7) Q42 一人で何もできない	2.9328
8) Q45 すぐ泣く	3.4118
合計得点	28.9160

に示した。第1因子「いとしい存在」や第2因子「個性的存在」および第6因子「尊重すべき存在」などのポジティブな「子ども観」因子においては、平均評定値が4を

F 5 (親の所有物的存在)

変 数 名	平均値
1) Q18 親の一部分	2.6555
2) Q23 大人に口答えはできない	2.0840
3) Q25 無能	1.6975
4) Q30 親のもの	2.5462
5) Q38 何も知らない	2.6387
合 計 得 点	11.6218

F 6 (尊重すべき存在)

変 数 名	平均値
1) Q 4 親とは別個の人間	4.5294
2) Q16 人間として尊重される	4.7647
3) Q24 すばらしい力がある	4.7479
4) Q36 生きる力がある	4.2605
合 計 得 点	18.3025

F 7 (教育すべき存在)

変 数 名	平均値
1) Q 2 親の思いど通りに育てる	1.9068
2) Q 7 親の言うことを聞くべき	3.0254
3) Q 8 きびしい教育が必要	2.7119
合 計 得 点	7.6441

超えていて、肯定度が高い。すなわち、「非常にあてはまる」とするものが多い。いっぽう、第3因子「煩わしい存在」や第4因子「未熟な存在」などのネガティブな「子ども観」因子においては、評定平均値は低く、肯定度は高くないことがわかる。また、大人の側の統制力に関連した第5因子「親の所有物的存在」や第7因子「教育すべき存在」の評定平均値は低く、あてはまらないとする傾向であり、大学生の「子ども観」は専制的でないことがわかる。

3. 信頼性係数

第1因子が $\alpha = .109$ と低かったので、I-T相関を算出し、相関値の低かった第6項目、

第35項目を省いて、再分析した結果を表3に示した。

表3 信頼性係数

変 数 名	平均値
いとおいしい	F1 .783
個性的	F2 .358
煩わしい	F3 .785
未熟	F4 .272
親の所有物	F5 .702
尊重すべき	F6 .664
教育すべき	F7 .591

$\alpha = .272$ から $\alpha = .783$ の範囲にあり、一部信頼性係数の低いものもあるが、第3因子「未熟な存在」を除いては概ね満足すべき値であった。

4. 保育職志望別による比較

将来保育職を志望するかどうかについてたずねたところ、「はい(志望者)」、「いいえ(非志望者)」、「無答(わからない)」の反応が得られた。

この3群を独立群とし、子ども観尺度の7下位因子の一要因の分散分析を行い、結果を表4に示した。有意な群の主効果がえられたのは、次の3因子であった。

表4 群間比較の結果

変 数 名	F 値	群間比較 志 非 ?
いとおいしい	F1 2.481	1 2 3 └───┘ └───┘ > <
個性的	F2 2.588	1 2 3 └───┘ >
煩わしい	F3 0.492	
未熟	F4 3.110	1 2 3 └───┘ └───┘ >
親の所有物	F5 0.206	└───┘ └───┘ >
尊重すべき	F6 1.714	
教育すべき	F7 0.146	

第1因子「いとおい存在」については、非志望群が他の2群よりも平均値が低い傾向がみられた。すなわち保育職を志望しない群は、子どもをいとおい存在と思う程度が他の群よりも低いことになる。

第2因子「個性的な存在」については、志望群が非志望群よりも平均値が高い傾向がみられた。すなわち、保育職を志望している群が志望していない群よりも、子どもを個性的な存在として肯定していることを示すものである。

第4因子「未熟な存在」は、志望群の平均値が他の2群よりも有意に高かった。すなわち、保育職を志望している者は、子どもは未熟なので保護すべき存在としてみていることを示す。これは、志望群が、他の群よりも成熟した見方であるといえる。

今後の課題

本研究の結果は、保育者養成のための指導技術の育成の基盤として、保育者の「子ども観」が重要であることを示唆するものである。

今後の検討課題としては次のようなことがあげられる。

①子ども観と保育実習の効果性について検討することは、保育者養成にとって重要な課題である。具体的には、子ども観の違いと、子どもへの接し方、指導技術、保育実習の評価等の側面との関連の検討である。

②「子ども観」尺度の項目内容に関する問題である。永澤(1996)の尺度は、小嶋(1983)や矢野(1992)を参考に①子どもは一個の人格をもつ人間である、②子どもは親の一部分・物である、③子どもはあらゆる可能性・能力をもっている、④子どもは無力・無能な存在である、⑤子どもはかわいい存在である、⑥子どもは憎らしい存在である、の6つの傾向を想定し、これらの傾向の内容を表す項目を独自に考案したものであった。これは研究者の側の前提に基づいた次元を提示できるという点では優れているが、対象者のいきいきとした「子ども観」が十分に表現されているという保証はない。インタビューや自由記述等の手段で、対象とする大学生の「子ども観」についての記述

を収集する必要があるだろう。

要約

本研究は、保育科短大生119名を対象とし、①保育科学生の「子ども観」尺度を作成し、②保育職への志望度の違いによる「子ども観」の違いを検討することを目的とした。因子分析の結果、「子ども観」尺度には7下位因子抽出された。因子名は、各々①「いとおい存在」、②「個性的な存在」、③「煩わしい存在」、④「未熟な存在」、⑤「親の所有物的存在」、⑥「尊重すべき存在」、⑦「教育すべき存在」と命名された。志望度別の比較から、保育職を志望する群の方が、志望しない群よりも子どもをいとおいくまた個性的な存在として、肯定していることが明らかになった。

参考文献

1. 東洋 1990 発達と文化 シリーズ人間の発達12 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
2. 藤永 保 1983 児童心理学 有斐閣
3. 柏木恵子 1978 「子どもの発達・学習・社会化」 有斐閣
4. 小嶋秀夫 1982 児童観研究序説—児童観研究の意義と方法— 現代の児童観と教育 (三枝孝弘・田畑治) 福村出版
5. 小嶋秀夫 1983 歴史的にみたわが国の児童発達観 永野重史・依田明(編) 発達心理学への招待1 母と子の出会い 新曜社 P p.185-205.
6. 箕浦康子 1990 文化のなかの子ども シリーズ人間の発達6 東京大学出版会
7. 箕浦康子他 1991 新・児童心理学講座第14巻 金子書房
8. 永澤道代 1996 母親の子ども観と養育態度の関係 追手門学院大学心理学論集 第4号 P p. 11-21.
9. 柴田直峰 1995 保育者の「子ども観」(1) 日本保育学会第48回大会研究論文集 p 208.
10. 友利久子 1995 地域特性からみた「子ども観」について日本女子大学家政学研究科児

童学専修 修士論文（未公刊）

第1巻 子どもの発達の基本問題 金子書
房 P p.61-94.

11. 矢野善夫 1992 児童観・発達観の構造と変
遷 村井潤一（編） 新・児童心理学講座